

外国語(英語)科における Small Talk の指導

～小学校での実践と中学校への提言～

川 村 一 代

〈要旨〉新学習指導要領全面実施を目前に控えた小学校では、2020年度からの小学校英語教科化に備え、2018年度より移行措置期間に入り、教科化を視野に入れた指導が行われている。2017年に文部科学省から提示された Small Talk も教科化を見越した活動の一つである。本稿では、小学校における Small Talk の実践をもとに、Small Talk の効果的な指導について考えてみたい。

Small Talk は「2時間に1回程度、帯活動で、あるテーマのもと、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりする」活動とされている。Small Talk の目的は、①既習表現を繰り返し使用できるようにしてその定着を図ること、②対話の続け方を指導することである。Small Talk には、指導者が中心となって話を進めるインプット型と、児童同士がやり取りを行うアウトプット型がある。本稿ではアウトプット型の Small Talk について詳しく見ていく。

Small Talk では、まず指導者からトピックが提示され、それについて児童がペアでやり取りを行う。その後、中間交流の時間があり、1回目のやり取りで困ったことや英語で言えなかったことがクラスでシェアされる。Small Talk を実践する中で、中間交流における指導は、①確認、②既習表現の想起、③言

外国語（英語）科における Small Talk の指導（川村）

い換え、④翻訳の4つのパターンで対応できることがわかってきた。これらはコミュニケーション方略と重なる部分が多い。中間交流での指導をふまえて行われる2回目のやり取りでは、同じ話題について1回目とは異なるパートナーとやり取りを行う。

小学校で教科としての英語教育を受けた新入生を迎える中学校でも Small Talk を行うことが2019年文部科学省より示された。それによると、中学校でも小学校と同じような手順で Small Talk が進められるようだ。小学校での指導は音声を中心に文字の使用は制限されているが、中学校では文字を使っでの指導が可能だ。文字を使うと正確性に焦点を当てることができる。中学校では、Small Talk のやり取りを行った後、話した内容を書かせ、そこから正確性の向上に繋げる指導を期待したい。

〈キーワード〉やり取り、アウトプット型 Small Talk、中間交流、言い換え、小中連携

1. はじめに

2020年度より小学校新学習指導要領が、2021年度より中学校新学習指導要領が全面実施され、高等学校では2020年度入学生から新学習指導要領が年次進行で実施される。今回の改定における最大の変更は、小学校の外国語教育であろう。小学校5・6年生を対象に「教科としての外国語（英語）」が年間70時間、3・4年生を対象に「外国語活動」が年間35時間実施される。小学校で教科としての外国語（英語）が必修化されるのは、歴史上初めてのことである。1992年に大阪の公立小学校2校が「国際理解・英語学習」指導の文部省（当時）研究開発学校の指定を受けて以来30年近くに亘り準備されてきた小学校外国語（英語）科が、2018・2019年度の移行措置期間を経て、2020年度について誕生するのである。小学校で英語が教科化されるのに伴い、小学校での学びを踏まえた指導が必要となる中学校英語教育も大きく変わる事となる。さらに2019年度より新学習指導要領への移行措置期間に入った高等学校でも英語教育の変

革が求められており、日本の学校英語教育は歴史的な転換期を迎えている。

2. 「話すこと [やり取り]」の重視

現行の小学校外国語活動および中学校・高等学校外国語科の学習指導要領（以下CS=Course of Study）に引き続き、新CSにおいても、小・中・高等学校を通じて、コミュニケーション能力を育成することが目標とされている。現行CSは、小学校で「聞くこと」「話すこと」、中・高等学校では「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能をバランスよく育成することを目指しているが、新CSでは、「話すこと」が「やり取り」と「発表」に分けられ、小・中・高等学校において「聞くこと」「読むこと」「話すこと [やり取り]」「話すこと [発表]」「書くこと」の4技能5領域の能力を育成することとなった。

これは、2013年に文部科学省が公開した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（文部科学省、2013）で、中・高校生の英語力の到達目標が、国際基準である「外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR：Common European Framework of Reference for Languages）」の指標を用いて示されたことに端を発する。CEFRは、言語の枠や国境を越えて、外国語の運用能力を同一の規準で測ることができる国際基準である（ブリティッシュカウンシル、2019）。CEFRの等級はA1、A2、B1、B2、C1、C2の6段階に分かれており、A1、A2は「基礎段階の言語使用者」、B1、B2は「自立した言語使用者」、C1、C2は「熟達した言語使用者」と評価される。文部科学省（2013）では、中学生はA1～A2程度、高校生はB1～B2程度の英語力を育成することが目標として掲げられた。

CEFRは目標とする言語を使って「具体的に何ができるのか」「どの程度うまくできるのか」という形で言語能力を表す“can-do descriptor”を用いて各段階の到達度を示している。これを参考に、2014年に英語教育の在り方に関する有識者会議から出された「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」（文部科学省、2014）では、「4技能を通じて『英語を使って何ができるようになるか』という観点か

外国語（英語）科における Small Talk の指導（川村）

ら学習指導到達目標（例：CAN-DO形式）を設定し、指導・評価方法を改善することが提言された。CEFRは言語活動の内容を「読むこと」「聞くこと」「やりとり」「表現」「書くこと」の5つの能力カテゴリーに分けて評価しているため、学習指導要領でも「聞くこと」「読むこと」「話すこと [やり取り]」「話すこと [発表]」「書くこと」の5領域が設定されることになったのである。これを受けて、新CSでは、小学校中学年においては、「聞くこと」「話すこと [やり取り]」「話すこと [発表]」の3領域、小学校高学年と中・高等学校においては「聞くこと」「読むこと」「話すこと [やり取り]」「話すこと [発表]」「書くこと」の5領域による目標設定がされている。

中学校学習指導要領解説（文部科学省，2018a）には改訂の要点として、「互いの考えや気持ちなどを伝え合う対話的な言語活動を一層重視する観点から、『話すこと [やり取り]』の領域を設定する」と記述されている。また、「話すこと」の [やり取り] について「対話者が同時に話し、聞くだけでなく、聞き手は話し手の話を先回りして予測し、その間に答えを準備するなど、やり取りは言語使用と言語学習の中でも大きな重要性が認められることから、コミュニケーションにおける中枢的役割を果たしている」と書かれており、新CSには、「話すこと [やり取り]」の能力育成の重視が掲げられている。

3. 小学校における Small Talk

「話すこと [やり取り]」の能力を確実に獲得させるための活動として、Small Talk と呼ばれる活動が2017年度に小学校で、2019年度には中学校でも導入されることが文部科学省から示された。Small Talk とは元来「四方山話」とか「おしゃべり」という意味であるが、小学校及び中学校英語においては、特別な意味を持って使われている。本稿では、教科化を見越して、すでに多くの小学校で実践されている小学校における Small Talk を中心に見ていきたい。

文部科学省（2017）は、Small Talk を高学年で設定される活動であるとし、「2時間に1回程度、帯活動で、あるテーマのもと、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりすること」としている。同書では「5年生は指導者の話を聞くことを中心に、6年生はペアで伝え合うこと

外国語（英語）科における Small Talk の指導（川村）

を中心に行う」とされているが、学年の枠に囚われる必要はないと考える。指導者の話を聞くことを中心とした Small Talk は「インプット型 Small Talk」と捉えることができ、学年に関係なく、新出語彙や表現にあまり馴染みのない単元のはじめの段階で用いることができるだろう。児童が語彙や表現に慣れてきたら、児童同士ペアでやり取りを行う「アウトプット型 Small Talk」に移行していくとよいと考える（図1参照）。Small Talk は主に高学年での活動とされているが、3・4年生でもインプット型から導入すれば十分行えるのではないだろうか。

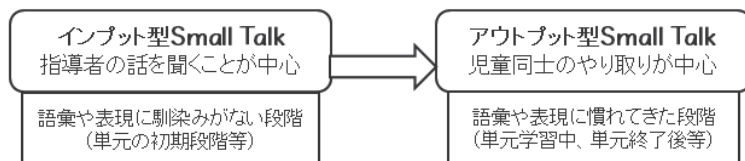


図1：インプット型 Small Talk とアウトプット型 Small Talk

前掲書には、Small Talk を行う目的として、①既習表現を繰り返し使用できるようにしてその定着を図ること、②対話の続け方を指導すること、の2点が挙げられている。①は「語彙や表現の定着」を目的としているが、「定着」とは単に語彙や表現を暗記することではない。ある語彙や表現がどんな場面や状況でも使えるようになったとき、その語彙や表現は「定着」したと言える。Small Talk で設定される様々な場面や状況の中で既習語彙や表現を繰り返し使うことにより、語彙や表現の定着が図られるであろう。

①は語彙や表現といった言語（英語）面がフォーカスされているのに対して、②は「対話の継続」というコミュニケーション面がフォーカスされている。文部科学省（2018b）の「言語活動に関する事項」「話すこと [やり取り]」では、「やり取りがある程度継続するように、相手が言ったことを繰り返したり、応答したり、質問したりすることができるようになるための指導も必要」と書かれている。

実際 Small Talk では、相手の言ったことに反応する Reaction (A: I like dogs. B: Me, too.), 相手が言ったことをそのまま繰り返す Repeat (A: Dogs

外国語（英語）科における Small Talk の指導（川村）

are cute. B: Dogs are cute.), 相手が言ったことの一部を変えて繰り返す Echoing (A: I like dogs. B: You like dogs.), 相手が言ったことに関する質問をする Question and Answer (A: I like dogs. B: Do you have a dog?) など, 対話を継続させるのに役立つ手立てが指導されている。これら対話を継続させる Reaction, Repeat, Echoing, Question and Answer という4つの手立てを使うには, 相手の言ったことを聞き取り理解していることが前提となる。逆の言い方をすれば, 4つの手立ては相手の言ったことを理解しているかどうかを確認するためのものでもある。

対話を継続させるための4つの手立ては Small Talk のときだけでなく常時意識されるものとして, それを行う前提条件となる Listen carefully と並んで「コミュニケーションの5つの約束」などとして黒板等に貼られ, 授業の最初に確認している学校もある (図2参照)。



図 2 : コミュニケーションの5つの約束
(三重大学教育学部附属小学校岡井学級の掲示物)

「対話を継続させるための指導」は, 「語彙や表現の定着」とともに, 小学校だけで完結するわけではなく, 中学校と連携して確実に積み重ねていくことが重要である (図3参照)。

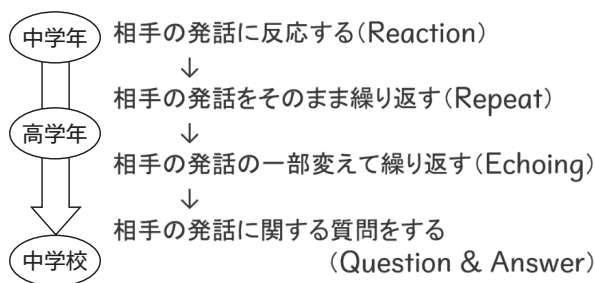


図 3 : 小・中学校を通しての対話を継続させるための基本的な表現の定着

4. Small Talk の手順

Small Talk は前述したように、指導者が中心に話をするインプット型と児童同士がやり取りをするアウトプット型がある。インプット型の Small Talk では、指導者は児童に聞かせたい、そして後には使わせたい英語を意図的に使って、自分自身の話をする。その際、児童に問いかけるなどして、児童を巻き込みながら話を進めることが大切である。Small Talk の目的は「既習表現の想起」であることから、基本的には未習表現は扱われない。しかし、インプット型 Small Talk では未習表現が入ることもあり得るのではないかと考える。その場合、未習表現を使って表現していることの意味を児童が推測できるよう、場面設定にはこだわりたい。

次に、児童同士がやり取りをするアウトプット型の Small Talk の手順を見ていきたい。文部科学省（2017）によると、児童同士がペアで伝え合うことを中心とした（アウトプット型¹）Small Talk のおよその進め方は以下の通りである。

- (1) 導入：指導者が児童とやり取りをしながら話題を導入する
- (2) 1回目のやり取り：児童同士でやり取りを行う
- (3) 1回目のやり取りの後：児童が伝えたくても英語で表現できなかったことはないか確認する
- (4) 2回目のやり取り：児童同士で2回目のやり取りを行う

図4は、上記をもとに作成した、Small Talk の指導手順（三重バージョン²）である。以下では、図4の流れに沿って、Small Talk の指導手順について説明していきたい。

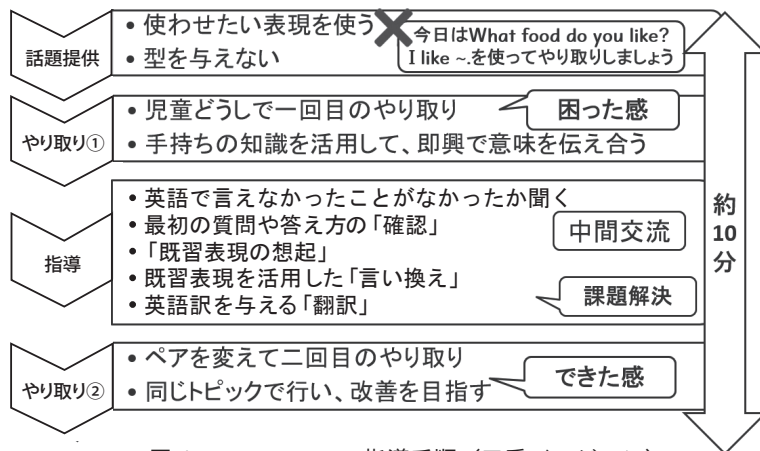


図 4：Small Talk の指導手順（三重バージョン）

4-1. 話題提供

指導者が2人以上いる場合は、指導者どうして既習表現を使った対話をし、話題を提供する。指導者が1人の場合は、児童とやり取りをして話題を示す。話題として選ぶのは、前時の復習となる内容や、本時の指導内容に関係があることである。対話の中で児童に使わせたい語彙や表現を意図的に示し、既習語彙や表現の想起を促す。新CSの目標にある「自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うことができるようにする（文部科学省、2018b）」ため、Small Talkでは、児童には自分の本当に言いたいことを言わせたい。それには指導者も自分の本当のことを言うことが大切となってくる。

話題提供の段階でしがちな誤りは最初に型を与えてしまうことである。「今日は What food do you like? I like ~. という英語を使ってやり取りしましょう」と、使う英語を児童に明示的に与えてしまうことがある。中には使用する英語を板書したり、あらかじめ用意しておいた模造紙等にかかれた英語を示し、練習をしてから児童同士のやり取りに入るケースもある。しかし、最初に英語表現を与えてしまうのはSmall Talkの主旨に反する。Small Talkの目的は「既習表現の想起」と「会話の継続」である。指導者が最初に英語を与える

と、児童は既習表現を想起する機会と自ら会話を始める機会を奪われてしまう。話題提供においては、使える英語表現を想起させるため、指導者が指導者どうし、あるいは児童とのやり取りの中で使える表現を提示することはあっても、あからさまな形で使う英語表現を与えてしまうことは避けたい。

Levelt の言語産出モデル（図5参照）によると、我々は言語を発するとき、「観念化装置（CONCEPTUALIZER）」で言語になる前のメッセージを生成し、その観念は「形式化装置（FORMULATOR）」で「文法・音声組み込み」がなされ内発的発話となり、「調音装置（ARTICULATOR）」で音声に変えて発話する。指導者が、児童が話す前に英語を与えてしまうと、これらの過程を踏む必要がなくなってしまう。とりわけ「形式化装置」では、観念（言いたいこと）を外国語（英語）の文法・音声に組み込むという外国語科特有の思考が働く。この外国語科でしか経験できない思考の機会を奪ってはならないのである。

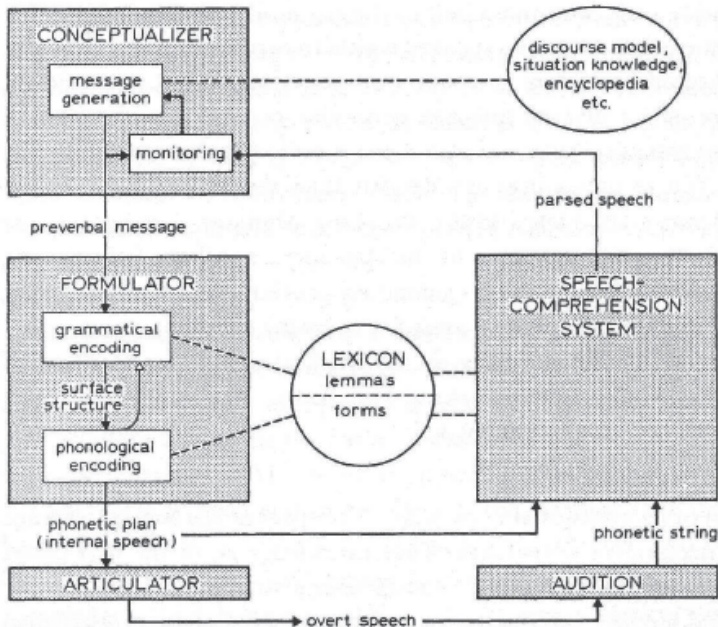


図5. Levelt の言語産出モデル (Levelt, 1989, p9 図1)

外国語（英語）科における Small Talk の指導（川村）

Small Talk では指導者が、児童が興味を持ちそうな話題やタイムリーな話題など児童が話したくなるような話題を提供し、児童は自分が言いたいことを英語に乗せて話す。まず言いたいこと（意味）があり、それを瞬時に英語に変換（形式化）して表現するのである。これこそ、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方が働く瞬間である。

4-2. やり取り①（1回目のやり取り）

話題提供があった後の1回目のやり取りで、児童はペアで即興的に対話をする。このとき英語での言い方がわからず、困る児童もいるだろうが、「困った感」を意識化させることも目的の一つである。「〇〇を英語で言いたい、何と言うのだろうか」という思いを抱いた児童は、それをどう英語で表現するか知りたくなり、課題意識を持つ。課題の自覚は意欲となり、主体的に解決しようとする行動につながる。英語がわからない児童は、次の中間交流で指導者に質問し、課題を解決することができる。

4-3. 指導（中間交流）

1回目のやり取りの後、指導者は“Do you have any questions?”と、困ったこと、言いたかったけれど言えなかった英語がなかったか尋ねる。このときの児童の質問に対しては、①確認、②既習表現の想起、③言い換え、④翻訳という4つのパターンで対処できることが実践（「5. Small Talk の実践」を参照）から明らかとなった。以下、①～④の内容と例を表1に示した。これらについては「5. Small Talk の実践」で詳しく見ていきたい。

外国語（英語）科における Small Talk の指導（川村）

表 1 : Small Talk の中間交流における指導者の対応の種類

指導者の対応の種類	指導内容と例
①確認	<p>最初の質問やその答え方がわからないという質問があった場合、質問や答えの英語を確認し、口頭で言う練習をする。</p> <p>例) 児童A: 最初の質問がわかりませんでした。 学級担任: 最初の質問は何でしたか? 児童B: What animal do you like? です。 学級担任: What animal do you like? ですね。では、皆でわたしに聞いてください。 児童全員: What animal do you like? 学級担任: I like dogs. Ask ○○-sensei. 児童全員: What animal do you like? 専科教員: I like cats.</p>
②既習表現の想起	<p>それまでの単元で学習した語彙や表現をそのまま使えば言えることを質問した児童に対しては「○年生のとき、△△の単元で、◇◇の言い方は習ったね。」と既習表現を想起させる。</p> <p>例) 児童C: 「一輪車に乗る」って英語で何と言いますか。 学級担任: 「一輪車に乗る」は5年生の時に I can のところで習いましたね。 児童D: 「一輪車に乗る」は "ride a unicycle" です。 学級担任: Cさん、言ってみましょうか。 児童C: I can ride a unicycle.</p>
③言い換え	<p>児童の言いたい英語そのものは既習表現で言えないが、言い方を工夫すれば既習表現で言えそうな場合は、言いたい内容を既習表現で言えるよう言い換える指導をする。</p> <p>例) 児童E: 「自由がほしい」って英語で言いたいです。 学級担任: 自由がほしいって、言い換えると何がほしいのですか? 児童E: 時間がほしいです。 学級担任: 時間は英語で? 児童E: Time. I want time. 学級担任: それでいいね。</p>
④翻訳	<p>児童が英語で言いたい語が、これからも使うと思われる汎用性のある語で、児童の負担にならない簡単なものであれば、英語訳を与える。</p> <p>例) 児童F: 「唐揚げ」って英語で何と言いますか。 専科教員: 唐揚げ is "deep fried chicken". とんかつ is "deep fried ……" 児童: Pork. 専科教員: えびフライ is …… 児童: Deep fried shrimp.</p>

4-4. やり取り②（2回目のやり取り）

中間交流の内容を踏まえて、2回目のやり取りを行う。中間交流で児童からの質問が出なかった場合は、「次は相手の言ったことに reaction するよう気を付けましょう」など、前述した対話を続けるための表現を使うよう指導することもできる。

2回目のやり取りは、パートナーを変えて、同じトピックで行う。同じトピックで行うことが大事である。同じことを2回繰り返せば、2回目はたいてい1回目よりスムーズに行えるようになるからだ。2回目のやり取りでは児童に「1回目より上手にできた」という達成感を持たせたい。2回目のやり取りがあまりうまくいかなければ、パートナーを変えて3回目のやり取りをさせてもよいだろう。時間的制約がある場合は、次時以降の Small Talk で再び扱うこともできる。

5. Small Talkの実践

以下は、2019年度1学期に三重大学教育学部附属小学校6年生の外国語活動の時間に行われた Small Talk の実践記録である。6年生では今年度、週に2時間、年間70時間の授業が行われており、文部科学省の移行期用教材『We Can! 2』

（文部科学省, 2018c）を使用し、学級担任と英語専科教員がティーム・ティーチングで指導している。Small Talk は授業の最初の挨拶や前時の復習の後行われている。

1学期は、We Can! 2 Unit1 This is ME!（自己紹介）、Unit3 He is famous. She is great.（人物紹介）、Unit4 I like my town.（自分たちの町・地域）の3つの単元が学習された³。以下は、それぞれの単元で扱った Small Talk のトピックと中間交流での児童の質問とそれに対する指導者の対応である。

5-1. Unit1 This is ME!（自己紹介）

この単元は5年生までに習った語彙や表現を使って自己紹介をする、既習内容の復習をねらいとした単元である。本単元の最終時には、既習語彙や表現を使って、皆の前で自己紹介が行われる。クラス替え直後の1学期の最初にふさ

外国語（英語）科における Small Talk の指導（川村）

わしい活動である。最終時の自己紹介では“I like ~.” “My birthday is ~.” “I can ~.”といった既習表現を使って、好きな動物、スポーツ、教科、季節、誕生日、できることなどについて皆の前で発表することになっていた。そのため、Small Talk では発表時に使うことのできる既習語彙・表現が想起できるトピックが選ばれた（表2参照）。第1時は、6年生第1回目の英語の授業だったため、Small Talk は行われなかった。また、第8時は、自己紹介の発表だったため、Small Talk は行われなかった。

まず、学級担任（HRT）と英語専科教員（JTE）が英語でやり取りをしながら今日のトピックを提示した。以下はその一例である。

JTE : ○○-sensei, what subject do you like?

HRT : I like science very much. Experiment（試験管を使うジェスチャーをしながら） is very exciting. △△-sensei, do you like science?

JTE : No, I don't. I don't like science.

HRT : Oh, what subject do you like?

JTE : I like English very much. I can speak English well. I'm good at speaking English. I like Japanese, too.

HRT : Today's topic is "subject". Make pairs and talk.

児童同士の1回目のやり取りが終わった後の中間交流で、学級担任が「困ったことや英語で言いたかったけれど言えなかったことはありましたか？」と問いかけた。多かった質問は「初めの質問がわからない」だった。これに対しては、学級担任がクラス全体に「最初の質問は何でしたか？」と聞き、最初の質問ができた複数の児童が、例えば第4時であれば、“What subject do you like?”と答えた（表2参照）。その後、クラス全員で学級担任と専科教員に“What subject do you like?”と聞いて質問を言う練習をし、2回目のやり取りに臨んだ。この「最初の質問がわからなかった」とか「答え方がわからなかった」という質問は、Small Talk の指導者の対応の「①確認」に分類される（表1参照）。なお、第4時は児童に馴染みのないカテゴリーである subject（教科）が話題であったため、このあと教科名の確認も行われた。

表 2. Unit1 の Small Talk のトピック・児童の質問・指導者の対応

時	トピック	児童の質問	指導者の対応
1	単元第 1 回目のため Small Talk は無し		
2	What animal do you like?	「サメ」の英語	④翻訳：「サメ」は shark
3	What sport do you like?	無し	
4	What subject do you like?	初めの質問がわからない	①確認：質問の確認と練習
5	When is your birthday?	初めの質問がわからない	①確認：質問の確認と練習
6	What season do you like?	「桜が好き」と言いたい	②既習表現の想起と④翻訳：～が好きは何と言う？→I like →「桜」はcherry blossoms →I like cherry blossoms.
7	What can you do?	初めの質問がわからない 「一輪車に乗る」と言いたい	①確認：質問の確認と練習 ②既習表現の想起：「一輪車に乗る」は5年生の時にI canのところで習ったね。→（他の児童が）ride a unicycle →I can ride a unicycle.
8	自己紹介（発表）のため Small Talk は無し		

6-2. Unit3 He is famous. She is great. (人物紹介)

次に、Unit3の学習時に行われたSmall Talkを見ていきたい（表3参照）。この単元では、“I eat ~.” “I like ~.” “I want ~.” “I study ~.” という表現を使い、自己紹介をしたり、第三者になって「なりきり自己紹介」をしてそれがだれかを当てるクイズを楽しんだりする。また、今まで音声で馴染んできた表現を、語順を意識して手本を見ながら書き写すという活動もある。この単元の Small Talk も Unit1 と同じような手順で進められた。児童は Small Talk に慣れてきたのか、前単元比べてたくさんの質問が出た。

本単元では、前単元では見られなかった「③言い換え」を指導する場面がいくつかあった。「親子丼」を英語で表現したい児童には「鶏肉と卵と玉ねぎが上にとったご飯」と、親子丼を説明することによって言い換えることが、「炒め物」と言いたい児童には、調理法から素材へと視点を転換することによって

外国語（英語）科における Small Talk の指導（川村）

「(炒め物の素材である) 肉と野菜」と言い換えることが提案された。このように発想を豊かにして、言いたいことを既習表現で言えるように「言い換え」を考えると、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方が働くと思われる。

表 3 : Unit3 の Small Talk のトピック・児童の質問・指導者の対応

時	トピック	児童の質問	指導者の対応
1	Who am I?	インプット型のため児童同士のやり取りは無し	
2	What do you eat for dinner?	初めの質問がわからない 「親子丼」の英語 「カキフライ」の英語 「レタス」の英語 「炒め物」の英語	①確認：質問の確認と練習 ③言い換えと②既習表現の想起：親子丼って何が入っている？→鶏肉、卵、玉ねぎ→鶏肉は英語で→chicken→卵は英語で→egg→玉ねぎは英語で→onion→鶏肉と卵と玉ねぎがご飯の上ののっているね（黒板に絵を描いて）「～の上」は5年生で習ったね→on→（黒板の絵を示しながら）chicken, egg and onion on rice ④翻訳：(ある児童が) oyster ④翻訳：(複数の児童が) lettuce ③言い換え：何の炒め物を食べるの？→肉と野菜→肉は英語で？→meat→野菜は英語で→vegetable→肉と野菜を食べるんだから→I eat meat and vegetable.→それでいいね（反省：炒め物を表す fried という言葉は炒め物全般や炒飯などにも使え汎用性があるため翻訳を与えてもよかった）
3	What do you want for your birthday?	初めの質問がわからない 「スパイク」の英語 「自由」の英語	①確認：質問の確認と練習 ③言い換え：いつ使うの？→サッカーをするとき→soccer shoes ③言い換え：何が欲しいの？→時間→時間は英語で？→Time. I want time.
4	What character do you like?	児童からの質問は無し	

外国語（英語）科における Small Talk の指導（川村）

5	What Doraemon's item do you want?	<p>「飛びたい」と言いたい</p> <p>「未来に行きたい」と言いたい</p> <p>「夢を見たい」と言いたい</p> <p>「すべて暗記できる」と言いたい</p> <p>「取り寄せる」と言いたい</p> <p>「かくれんぼ」の英語「通り抜ける」と言いたい</p>	<p>②既習表現の想起：～したいという言い方は？→I want to →飛ぶは？→Fly. I want to fly.</p> <p>②既習表現の想起と④翻訳：～したいという言い方は？→I want to →未来は future→I want to go to future.⁴</p> <p>②既習表現の想起：したいは？→I want to →見るは？→see→夢は？→dream →I want to see a dream.</p> <p>②既習表現の想起と④翻訳：できるは？→I can →暗記は memorize →I can memorize. →全部は英語で？→All. I can memorize all.</p> <p>③言い換え：取り寄せるってどういうこと？→注文するってこと→注文は英語で？カタカナであるね→オーダー, I want to order.</p> <p>④翻訳：hide and seek</p> <p>②既習表現の想起と④翻訳：わたしは行けるって何て言う？→I can go.→「通って」って through をつけるといいよ →I can go through.</p>
6	Who am I?	インプット型のため児童同士のやり取りは無し	
7	What famous person do you like?	<p>「いない」と言いたい</p> <p>「絵が得意」と言いたい</p> <p>「演技が上手い」と言いたい</p>	<p>④翻訳：No one.</p> <p>②既習表現の想起と④翻訳：「わたしは得意」は？5年生のとき習ったね→I'm good at. →絵は？→picture →絵を描くは drawing pictures →I'm good at drawing pictures.</p> <p>②既習表現の想起と④翻訳：「わたしは上手い」は？→I'm good at→演技は actions →I'm good at actions. (反省：演技は performanceの方がよかった。)</p>
8	クイズ大会（発表）のため Small Talk 無し		

6-3. Unit4 I like my town. (自分たちの町, 地域)

Unit4では、自分の町にある施設・無い施設・欲しい施設を発表することにより、自分の住む町や地域を紹介することが単元ゴールとして設定された。児童は施設の言い方を学び、“We have ~.” “We don't have ~.” “I want ~.”という表現を使って自分の町を紹介する英語を聞いたり言ったりした。外国語活動の授業と並行して、総合的な学習の時間に自分の地域について調べ、タブレット端末を使って発表資料を作成した。第5時のSmall Talkのトピックは、発表内容の一部であったため、中間交流における質問が多かったと思われる。

表4. Unit4のSmall Talkのトピック・児童の質問・指導者の対応

時	トピック	児童の質問	指導者の対応
1	単元第1回目のためSmall Talkは無し		
2	What is your favorite place at this school?	初めの質問がわからない 「広い」の英語	①確認：質問の確認と練習 ③言い換え：「広い」ということは？→大きい→大きいは？→big
3	What do you have in your town?	「買い物ができる」と言いたい	②既習表現の想起：「わたしはできる」は？→I can→「買う」は？→Buy. I can buy.
4	Why (do you like your town)?	「古墳」の英語	④翻訳：墓はgrave（反省：tombの方がよかった。あるいはkofunでもよかった）
5	What do you want in your town?	初めの質問がわからない 答え方がわからない 「大きい公園」と言いたい 「びわの木がある」と言いたい 「遊具のある公園」と言いたい 「博物館」と言いたい	①確認：質問の確認と練習 ①確認：答え方の確認と練習 ②既習表現の想起：大きいは？→big→公園は？→Park. Big park. ③言い換えと④翻訳：木でいいね→tree→with treeとすればいいよ ④翻訳：遊具のある公園はplaygroundで遊具の無い公園はpark ④翻訳：博物館はmuseum

外国語（英語）科における Small Talk の指導（川村）

		「いかが好きだから」と言いたい 「漫画カフェ」と言いたい 「読書が好き」と言いたい	④翻訳：いかはsquid ④ 翻訳：漫画は？→comic book→漫画カフェは？→comic book café ②既習表現の想起：～が好きは？→I like→読書は本を読むから「読む」は英語で？→Reading. I like reading.
6	What do you want in your town?	「ギリギリ」と言いたい 「安心」と言いたい	③言い換えと④翻訳：どういうこと？→「お母さんがガソリンが無くなるギリギリまでガソリンを入れない」と言いたい→お母さんがガソリンをたくさん使うってことね、use much gasoline（反省：以下のような指導をすればよかった：どういうこと？→「お母さんがガソリンが無くなるギリギリまでガソリンを入れない」と言いたい。→だから近くにガソリンスタンドがほしいんだね。ガソリンスタンドは英語で？→Gas station. I want a gas station. →お母さんのために欲しいんだね。～のためは？→for →I want a gas station for my mother.) ④翻訳：安心はsafe
7	発表のためSmall Talkは無し		

7. 考察

Small Talk の実践において、児童は1回目のやり取りで自分が言いたいことと言えることのギャップに気づき、そのギャップを埋めるため、中間交流で多くの質問をした。それに対して指導者は4種類の対応策を意識しながら、児童とともにより良い表現を見つけ出した。今回はなかったが、対応できない場合は、次時に持ち越して調べてくることにしていた。指導者の対応を分類すると、以下のようなになる。

表 5：中間交流での指導者の対応とその回数

	Unit 1	Unit 3	Unit 4	合計
①確認	3	2	3	8 (16.7%)
②既習表現の想起	2	8	3	13 (27.1%)
③言い換え	0	5	3	8 (16.7%)
④翻訳	2	9	8	19 (39.6%)
合計	7	24	17	48

①～④の指導者の対応は、言いたいことが言えないときにどうすればよいかという、コミュニケーション方略の指導にあたるだろう。Tarone (1977) は、コミュニケーション方略 (Communication Strategies) を「回避 (avoidance)」「言い換え (paraphrase)」「転移 (transfer)」「援助要請 (appeal for assistance)」「ジェスチャー使用 (mime)」の5つに分類し、それぞれについて以下のような下位方略を挙げている。

- (1) 回避 (Avoidance)
 - (a) トピック回避 (topic avoidance)
 - (b) メッセージ中断 (message abandonment)
- (2) 言い換え (paraphrase)
 - (a) 近似表現 (approximation), (b) 造語 (word coinage)
 - (c) 遠回し表現 (circumlocution)
- (3) 転移 (transfer)
 - (a) 逐語訳 (literal translation), (b) 母語使用 (language switch)
- (4) 援助要請 (appeal for assistance)
- (5) ジェスチャー使用 (mime)

中間交流で児童の質問に対する指導者の対応①～④を上記の分類に照らし合わせてみると、①確認は、英語で何と言えればいいか他者から聞き出す「援助要請」にあたるであろう。③言い換えは、まさに“paraphrase”そのものである。実践事例を見てみると、その中でも正確ではないが似た意味の語彙や言い

回しを用いる「近似表現」と、言いたいことを説明する「遠回し表現」にあたる方略が指導されている。「取り寄せる」を「注文する」に言い換えたのが「近似表現」にあたり、「親子丼」を「鶏肉と卵と玉ねぎが上のにったご飯」と、親子丼を説明したのが「遠回し表現」にあたるだろう。漫画カフェを「漫画は？」「comic book」「漫画カフェは？」「comic book café」と児童から引き出したのは、「転移」の「逐語訳」にあたる方略の指導をしたといえるだろう。

Canale (1983) は、「コミュニケーション能力 (communication competence)」は語彙・文法・音韻等の知識をもとに一文レベルの文を作り出す「言語能力 (linguistic competence)」, 文をつなげて結束性や一貫性のある会話や文章を作り出す「談話能力 (discourse competence)」, 社会的に適切な言語を使う「社会言語学的能力 (sociolinguistic competence)」, 言語を運用する中で起こる様々な状況や不十分な伝達能力に起因するコミュニケーションにおける挫折を修復する「方略的能力 (strategic competence)」の4つの要素から構成されているとしている。上記の実践記録では、Small Talk の中間交流で「コミュニケーション方略」の指導が行われていた。Small Talk の中間交流では、コミュニケーション能力の一つである「方略的能力」を高める指導を行うことが可能であり、それを意識して指導することを提案したい。

8. 中学校での Small Talk

2018年度より小学校で新CS 全面実施に向けての移行措置期間が始まり、5・6年生においては教科の要素が入った文部科学省作成の移行期用教材『We Can!』が使用され、本稿で見てきたように Small Talk も実施されている。小学校で大きく変わりつつある英語教育を受けた中学校新入生に対応するため、2019年に「移行期における指導資料について（中学校外国語科）」（文部科学省、2019a）が示され、その中で、『We Can!』を活用しての小中接続単位とともに、Small Talk の実施案が提示された。中学校では、2単位時間に1回、5～15分間の Small Talk の実施を想定し、70時間の年間計画を作成すること、トピックを4～5に焦点化し、それらを年間を通じて扱うことが求められることとなった。

外国語（英語）科における Small Talk の指導（川村）

中学校における Small Talk の目的は、①「話すこと[やり取り]」の能力を少しずつ身に付けることができるようにする、②「増加すると思われる語」を聞いたり話したりすることができるようにする、という2点が挙げられている。②については、中学校新CSでは、扱う語数が現行の1200語から2200～2500語程度に増加することがその背景にある。

文部科学省（2019a）には、中学校の Small Talk の手順が以下のように示されている。

- (1) Interactive Teacher Talk
- (2) S-S Interaction 1
- (3) Sharing
- (4) S-S Interaction 2

(1) Interactive Teacher Talkでは、「教師自身も自分自身のことを英語で伝える」としている。(2) S-S Interaction 1は、生徒同士の1回目のやり取りである。(3) Sharingは、1回目のやり取りでの問題や疑問をクラスで共有する中間交流のことである。(4) S-S Interaction 2は、生徒同士の2回目のやり取りである。これを見ると、中学校においても、Small Talk の手順は小学校と同じである。使用する英語は中学校レベルの英語となり、Sharing（中間交流）での英語の使用量が小学校よりは増えるであろうが、基本的に同じ内容である。

小学校は音声中心に学習が進められているが、中学校では文字を使い、「書くこと」の比重が高まる。音声と文字の違いは、その正確さにある。話すときは、多少正確さを欠いても、意味が伝わり、コミュニケーションが成立すれば事が足りる。しかし、文字で書かれたものについては、正確さが問われる。中学校では、Small Talk の2回目のやり取りの後、話した内容を書き、正確さを高める活動にまでもっていくことを提案したい。具体的には、Small Talk で話した内容を書かせ、それを回収し、多くの生徒に見られる間違いや指導すべきと思われる間違いをクイズにして、次の時間の最初に復習として生徒に解かせ

るのである。無味乾燥な問題集の問題とは異なり、自分たちが話し書いたものから作られた問題に、生徒は興味を持って取り組むことだろう。生徒自身が語った自分の思いや考えを表す英語は、この先も使われる可能性が高いことが予想される。こうした指導を地道に繰り返していくことで、間違いが減り、正確性が増していくのではないかと期待する。

9. おわりに

新CSでは、社会に出てからも学校で学んだことを生かせるよう、実際の社会や生活で生きて働く「知識及び技能」、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」、学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性」の三つの力をバランスよく育む（文部科学省，2019b）としている。英語教育においても、教室の中だけでなく、教室の外の実際のコミュニケーションの場で機能する英語使用者を育てるため、未知の状況にも対応できる英語コミュニケーション力の育成が求められている。小・中学校で連携・継続してSmall Talkを行い、既習表現を何度も繰り返し使う機会を提供することにより、話すこと〔やり取り〕の能力が向上し、未知の状況においても英語でコミュニケーションが図れる児童・生徒が増えていくことを願ってやまない。

注

1. カッコ内の「アウトプット型」は、筆者による挿入である。
2. 筆者が教員研修や研究会等で三重県内を中心に提案している手順である。
3. 年間計画でUnit2 は2学期に行われることになっていた。
4. 正しい英語は I want to go to the future. であるが、児童の負担を考え、ここでは the がいないことに対する指導は行われなかった。

謝辞

本研究にご協力いただいた三重大学教育学部附属小学校教諭岡井崇先生、本稿執筆にあたり有益なご助言をいただいた小学校英語教育学会前常任理事・鈴鹿市小学校元教諭鷹巣雅英先生に、心からお礼を申し上げます。

引用文献

- ブリティッシュカウンシル (2019). 「CEFR (ヨーロッパ言語共通参照枠)」(最終閲覧日: 2019年9月28日) <https://www.britishcouncil.jp/programmes/english-education/updates/4skills/about/cefr>
- Canale, M. (1983). From Communicative Competence to Communicative Language Pedagogy, in J. C. Richards & R. W. Schmidt (Eds.) *Language and Communication*, London: Longman.
- Levelt, W. J. M. (1989). *Speaking: From Intention to Articulation*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- 文部科学省 (2013). 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画 (最終閲覧日: 2019年9月28日) http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf
- 文部科学省 (2014). 「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告 ～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」(最終閲覧日: 2019年10月8日) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm
- 文部科学省 (2017). 『外国語活動・外国語 研修ガイドブック』(最終閲覧日: 2019年9月28日) http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm
- 文部科学省 (2018a). 『中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 外国語編』東京: 開隆堂
- 文部科学省 (2018b). 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 外国語活動・外国語編』東京: 開隆堂
- 文部科学省 (2018c). 『We Can! 2』東京: 東京書籍
- 文部科学省 (2019a). 「移行期間における指導資料について (中学校外国語科)」(最終閲覧日: 2019年10月12日) http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail

外国語（英語）科における Small Talk の指導（川村）

/__icsFiles/afieldfile/2019/04/05/1414476_1.pdf

文部科学省（2019b）「子どもの未来を支える皆さまと共有したい新しい学習指導要領
生きる力 学びの、その先へ」（最終閲覧日：2019年9月28日）http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/02/14/1413516_001_1.pdf

Tarone, E. (1977). Conscious communication strategies in interlanguage: A progress report, in H. D. Brown, C. Yorio & R. Crymes (Eds.), *On TESOL '77: Teaching and Learning English as a Second Language*, Washington, D.C. : TESOL.

Teaching Speaking through Small Talk :
Practice at an Elementary School and Suggestions for Junior High Schools

Kazuyo KAWAMURA

Abstract

The new course of study will be implemented from 2020 in elementary schools, and English as a subject will be mandatory in all elementary schools in Japan for the first time in its history. With an eye to the implementation of the new course of study, some new activities have been introduced by the Ministry of Education. One of them is the activity called “Small Talk”. This paper suggests an effective way of teaching speaking through Small Talk based on the findings from the practice of Small Talk in an elementary school.

Small Talk is supposed to be held once every two class hours. The purpose of Small Talk is (1) to give students opportunities to use learned vocabulary and English expressions repeatedly, and (2) to teach students how to maintain conversation. There are two kinds of Small Talk. One is input-type Small Talk, in which the teacher mainly talks. The other is output-type Small Talk, in which students talk in pairs. This paper focuses on the output-type Small Talk.

To start Small Talk, the teacher gives a topic to students. Students talk impromptu about the topic in pairs. After the first talk is sharing time. Teacher asks students if they had any problems expressing themselves in English. Students can ask the teacher questions that they had during the first talk. The practice of Small Talk in an elementary school finds that the teacher can use the four patterns to deal with students' questions: (1) Confirmation, (2) Recall learned English, (3) Paraphrasing, and (4) Translation.

These four are closely related to communication strategies. Students can improve their speaking not only by recalling and using what they have learned before but also by using communication strategies. Based on the learning in the sharing time, students have the second talk with a different partner on the same topic.

The Ministry of Education has announced that Small Talk will also be introduced in junior high schools. According to its guidance, the procedure for Small Talk is the same as the one in elementary school. The use of writing is very limited in elementary school while writing is mandatory in junior high school. Writing requires accuracy. This paper strongly suggests that junior high school students write what they have talked about in Small Talk. Teachers can help improve students' accuracy using what they write about the topic of Small Talk.

Keywords: interaction, output-type Small Talk, sharing time, paraphrasing, learning consistency of elementary and junior high school